

東京大学史史料室ニュース

第44号 2010・3・31

目次

東京大学史史料室所蔵「文部往復」の一断面	2
戦前期の大学総長の人物像について—濱尾新・外山正一・長與又郎の逸話—	4
受贈図書一覧	6
史料室日誌抄録	8

アイドルボーイ日記(鈍六誌)の二節

十二月四日××

寝た儘で『学生』の十一月号を見ると澤柳前
文部次官が「修養の方法としての主義」と云
ふことを書いて御座る。

×××拙者も一つ晩起主義と云ふ主義を立
て、確乎不拔それを守って動かず、どんな用
事があつても、どんな差支があつても、必ら
ず午前十二時五十九分五十九秒まで寝るこ
とにしやうか知ら?

(『学生』二巻九号、一九二〇年十二月)



筆者は近代日本教育史を研究しているが、東京大学史史料室に通い始めたのは、大学院の博士課程に進学した1990年代初め頃だったと思う。その後、94年から96年までは、故中野実氏のもとで「東京大学の学徒動員・学徒出陣」の調査に関わる教務補佐員の一人として、週2回は史料室に通ったが、この時初めて、史料室所蔵の「文部往復」を手取るようになった。

その調査の時に筆者が見た「文部往復」は、1937年から1945年までの「文部往復」であり、日中戦争からアジア・太平洋戦争敗戦までの東京帝国大学の動向に関する年表や学徒動員一覧を、文部省から東京帝国大学に向けて出された通牒や照会、それに対する東京帝国大学側からの回答を手がかりに作成する作業を通して見たものであった。筆者は一教務補佐員として「文部往復」を見て、必要と思われる内容を抽出してデータを打ち込んでいたに過ぎないが、これが、該当する時期の「文部往復」を目にした最初の機会であった。

実は、その作業の最中に、何がどのように重要であるのかはわからないが、個人的に気にかかる情報はいくつも存在していた。そのうちの 하나가、日本諸学振興委員会についての通牒や照会-回答の往復文書であった。現在、筆者を含めて総勢9名で、この日本諸学振興委員会に関する共同研究を行っており、戦時下に思想・学問統制、学界再編・組織化を行う組織として作られた文部省教学局、中でも日本諸学振興委員会(1936年～1945年)の組織とその活動を調査し、実態を解明することをめざしている。

こうして改めて、東京大学史史料室所蔵の「文部往復」(以下、東大「文部往復」と略す)に収められている、日本諸学振興委員会に関する通牒や文部省と東京帝国大学の往復に注目して調べるようになった。それと同時に、共同研究のメンバーで分担して、他大学に所蔵されている文部省との往復文書、とりわけ日本諸学振興委員会に関する文書の調査を続けてきた。筆者も立教学院史資料センターや関西学院学院史編纂室の調査などを行ってきたが、東京大学史史料室には、他には所蔵が確認できていない通牒を含めて、日本諸学振興委員会に関する通牒や往復文書が残されているこ

とも明らかになってきた。そして、その調査・作業を通して、東大「文部往復」が、やはり戦時期日本の高等教育・研究機関に対する文部省の具体的な政策や、それに対する大学側の反応を知る上で不可欠の史料であることをはっきり認識するようになった。

他方で、東大「文部往復」には、いくつかの“特徴”があることも意識できるようになってきた。以下、「文部往復」のうち、1930年代半ばから1940年代半ばまでというかなり限定的な期間のものに関することであり、「文部往復」を利用してきた研究者の方たちには既知のことかもしれないが、筆者がそれらを何度か調べた限りで理解した“特徴”を記しておこうと思う。

第一に、とりわけ1944年、45年の東大「文部往復」には、管見の限り、他の大学では見つかっていない、文部省からの通牒や文部省との往復が存在しているということである。

1943年10月、高等教育機関に在籍する20歳以上の男子学生・生徒に認められていた徴集延期措置が停止され、文科系学生・生徒が直ちに戦闘員としての動員対象になると(所謂「学徒出陣」)、多くの大学では文科系学部を廃止、縮小、学科改編をせざるを得なくなり、理工系学部の新設を行うなどして、大学としての存続がはかられた。それまで文科系私立大学であったところにとってはまさに大学存亡の危機となり、筆者が現在勤務する立教大学でも、この時期に一度文学部を閉鎖し、新たに立教理科専門学校を開校した。しかし、そうした動きが高等教育機関全般に見られる中であって、東京帝国大学は、(42年の第二工学部新設など戦時期に学部・学科・研究所などの改編・新設も行いつつ)文科系、理科系のすべてを揃えた総合大学であり続けることが出来た。

このことは、1944年や45年時点にあっても、文部省から通牒を発信した際の対象、即ち受信側の組織が、断絶なく存続できたということの意味している。換言するならば、この時期の多くの大学では、大学組織自体の改編のために、従来受信側となっていた組織が改廃されていたが、東京帝国大学ではそうした変化を大きくは被っていないかったということになる。

1944年、45年に文部省から東京帝国大学宛に出された通牒や照会は、他の高等教育・研究機関にも同様に出されたものも少なからず存在しており、それらは現在も様々な大学の資料室やアーカイブズで散見されるが、東大「文部往復」以上に揃った状態で見られるところは今のところ見あたらない。当時、東京帝国大学以外の大学にも届いていたが失われたり散逸した可能性もあろうが、そもそも他の大学には発信すべき対象となる学生・教職員や組織が、44年、45年時点で存在しなくなっていた可能性もある。

例えば、筆者が調査した関西学院学院史編纂室「文部省関係文書」（以下、関西学院「文部省関係文書」と略す）は、以前関西学院学院史編纂室『学院史編纂室便り』No.28（2008年12月）の拙稿「関西学院学院史編纂室所蔵『文部省関係文書』について」でも書いたように、東大「文部往復」以上に、文部省からの通牒を通覧するのに適した状態で綴られている。しかし、44年に商経学部が募集停止されるなど、44年、45年には文科系私立大学として、従来とは異なる組織に改編されたことにより、恐らく文部省の通牒を受信する側の組織に断絶が生じて、残された通牒数がそれ以前に比べてかなり減ったように見受けられる。こうした断絶がない、44年、45年の東大「文部往復」は、他大学では見られない史料が確かに存在している。

第二の東大「文部往復」の“特徴”は、基本的に文部省の通牒発信、照会－回答部局ごとに分類した上で、年度ごとに綴られていることである。文部大臣・文部次官、官房秘書課、専門学務局、図書局、そして筆者が調べてきた思想局・教学局などの部局ごとに分けられている。

これが東大「文部往復」の“特徴”であることに気づいたのは、筆者が上記の関西学院「文部省関係文書」を調査していた時のことであった。関西学院「文部省関係文書」は、文部省の部局ごとではなく、基本的に発信部局とは関係なしに、文部省からの通牒や往復文書を年度ごとに年月日順に綴ったものである。年月日順に辿ると、例えば1930年代から40年代の大学に対する学生や教員への思想・学問統制に関わる文部省からの通牒が、専門学務局・専門教育局や思想局・教学局などから出されており、ある政策がいわば部局横断的に推し進められていた様子が浮かび上がってきた。ある一つの通牒がどのような政策の中に位置づき、どのように重要な内容のものであるかは、関西学院「文部省関係文書」のように部局横断的に年月日順に綴ら

れた史料によって初めて見えてくるところが少なくない。東大「文部往復」に綴られた史料は、部局で区切られているため、こうした全体像を把握するには難易度の高い史料群であると言えよう。筆者は、関西学院「文部省関係文書」を調査した後に、東大「文部往復」を再び見て、そこでようやく一つの通牒の持つ重要性や他の通牒との関連性に気づくという経験を何度もすることになった。

文部省の発信部局ごとに分類された東大「文部往復」は、また、必ずしもすべての文部省からの通牒や往復文書を綴ったものではない、ということにも注意を払う必要がある。例えば、1942年11月に文部省科学局が設置されて以降の通牒類なども、東大「文部往復」の中には「科学局」に分類されて収められているが、科学動員などの実態解明に不可欠な、科学局からの研究助成に関わる通牒、往復文書は、別に「科学研究費関係」として綴られている。筆者が問い合わせた限りの多くの大学史料室やアーカイブズでは、「文部往復」といったまとめられた簿冊は現在は見あたらず（あるいは部外者に見せられないという事情があるのかもしれないが）、文部省と大学のやりとりも、ある事案ごとにまとめられた簿冊の中に断片的に残っているに過ぎないというお話を伺い、東大や関西学院のようなケースがむしろ例外的であるということを知った。しかし、最も多くの文部省との通牒が綴られていると思われる東大「文部往復」でも、別に綴られた事案が確実に存在していると考えられることは見逃してはいけないであろう。

東大「文部往復」を見る機会は、今後もあると思われるが、そこにどのような史料が不在であるのかということにも思いをめぐらせつつ、見続けていきたいと思う。

付記：今回の調査で史料室にうかがう際には、谷本宗生さん、柏木恵美さん、現在の教務補佐員など、史料室のみなさんに様々な形でお世話になっている。記して感謝したい。

（なす けいこ：立教大学文学部）

戦前期の大学総長の人物像について —濱尾新・外山正一・長與又郎の逸話—

谷本宗生

はじめに

今回は、本学の教養学部図書館、医学部図書館、総合図書館に所蔵されている、歴史的に貴重な本学校友会・同窓会雑誌などを手がかりにして、戦前期の大学総長の人物像に迫りたいと思う。初代総長である渡邊洪基（1847～1901年）に始まり、現在の東京大学総長は第29代濱田純一総長である。国立大学法人化以降、大学総長としてのリーダーシップがいっそう期待されている。それは、大学総長に教職員・学生らがもっている優れた力を最大限に引き出しながら、大学全体を統括的に動かしていくことをもとめるからであろう。あらためて大学総長という存在について考え理解するよい機会として、戦前期の本学総長を務めた濱尾新（1849～1925年）・外山正一（1848～1900年）・長與又郎（1878～1941年）らの逸話に注目してみたいと思う。

濱尾新の逸話

濱尾新は第3代及び第8代の大学総長を務め、総長の在任期間は計11年間にも及び、本学大学総長を象徴する存在である。土木総長とも称され、大学キャンパスの整備、とくに大学のシンボルとなる銀杏並木の植林を推進したとされる。大蔵次官などを務めた添田壽一（1884年文・卒）によれば、「親切で綿密な方で、こまかい所までもよく気を付けて決して物事を忽にされない方でした。…今大学構内の道の両側に植えてある大銀杏は元は学校の隅つこにあつたものださうですがこれを先生が見られて道の両側に植えて街路樹にしたらどうだろうと思ひ附かれ、構内に植えるには何本位苗木が必要か又何処何処にどの位植えたらいいだろうか又どの位費用が要るだろうかと何から何でもチャンと計算して、あの木を植えられたのださうで当事者も之にはすつかり驚いて恐れ入つたさうです。」（『濱尾新先生』『一高同窓会会報』3号、1926年）と証言している。大蔵大臣などを務めた阪谷芳郎（1884年文・卒）も、「日本の大学就中東京帝国大学の母親は故濱尾子爵であるといふことは何人も異論のないやう…その情意を知らない他人から見ると少しく我が儘ではないかと思はれるやうなこともないではなかつたであろう。然しその我が儘かと思はれるやうなところに真に名状することの出来ない温情が満ち満ちて居つたので

ある。故工科大学長工学博士渡邊渡君が現在の本郷の大学正門の設計が出来た時に、笑つて余に語られたことがある。「…工科大学には我が邦屈指の建築家が幾人も居られるが、その専門家の考案になる設計は総て濱尾さんの気に入らず、今度は遂に自分〔実際には伊東忠太〕で設計せられ、変なものが出来上つた。…」と。即ち現在の正門がそれである。この話を味ふと濱尾子爵の大学に対する温情の模様が躍如たるものがあるといはねばならぬ。」（『故濱尾子爵と学士会』『学士会月報』451号、1925年）と、濱尾の人物像について興味深く語っている。



外山正一

外山正一の逸話

第4代帝国大学総長を務めた外山正一は、俗に“赤門天狗”とも称せられた東京大学・帝国大学創設期の邦人教官の先がけである。明治日本の大学行政及び教育活動に尽力した人物である。専門的な学術研究の枠にとどまらず、文学・絵画・演劇など文芸活動全般に活躍した点も忘れてはならないであろう。漢学の近代的研究の開拓者である服部宇之吉（1890年文・卒）は、「予等が入学して後に始めて教授が学生を自宅に喚んで馳走をすることが行はれた。それは時の総長渡邊洪基氏（帝国大学最初の総長で、人呼んで帝国といつた）の意見として教授と学生との懇親を図るべしと主張されたのが、学生の少ない

文科大学では教授から学生を自宅に喚ぶといふことになつたのである。…その事が数回行はれた後に学長外山正一氏より自宅馳走は手数がかかつて困る向もあるゆえ、教授が費用全部を負担し教授学生打ち連れて日帰りの遠足を為すことにすべし、との旨を達せられた。そこで三学生たりし予等が委員として鎌倉へ遠足をした。外山学長の外に教授が若干見えられた。此れが文学部学友会遠足の起源と信ずるのである。」「(四十年一と昔)『文学部学友会報』創刊号、1928年)と、文学部遠足と外山の関係に言及している。山口高等商業学校長などを務め、漱石『坊っちゃん』の「赤シャツ」のモデルともいわれる横地石太郎(1884年理・卒)によれば、「外山正一先生にも予備門二級生より本科一年生まで菊池[大麓]先生と同様三四年間教はつた。菊池先生は頭髪は中央より分けて居られ英国風の紳士であつたが、外山先生は常に五分刈りの毬栗天窓のパンカラで辺幅を飾らぬ熱情に富み開豁にして多少滑稽味のある方で、講義に力が入り屢々教室に於ても握り拳を突き出してゼスチュアをなし、語句の後にはユー・シー、ユー・シーを付け加へて押し込める様な講義振りであつた。先生のユー・シーは有名なるもので、ある時一時間の講義中に幾つ出るか数へて見たら二十三日の多きに達したことを記憶する。…外山先生には私は予備門では英米大家の論文及演説の義解を英語で教はつた、即ちパラフレーズであつたから、初めの内は仲々骨が折れたが馴るるに従うて文章字義の真意を理解する様になり、英語に就ての興味が次第に増す様になつた。」「(古き思出)『一高同窓会会報』30号、1936年)とし、自分の服装には無頓着ないっぽう信ずる教育に集中し続けるといった外山の姿がうかがえる。

長與又郎の逸話

長與又郎は医学者長與専齋の三男で病理学を専攻し、伝染病研究所長をはじめ第12代東京帝国大学総長を務めた。長與の普段の講義ぶりについては、『長與又郎伝』1944年なかで「講義用ノートは無雑作に机の上へ放り出して、左手をズボンのポケットに突込んだまま、『レーベル、ミルツ、クノツヘンマルク、リンフドリュエーゼー等、いろいろの臓器にッ…』と、まるで喧嘩腰とも受とれる位に、澆刺と歯切れよく吐き出される病理学各論の講義は、学生たちが顔をあげる暇もなく、終つてほっとひと息つく間に、もう博士の姿は扉の向ふへ大股に消えていた。途端に埃及煙草の甘い香りが漂つて来る。一疋瘡玉をそッと包んで置いてあるやうな、また闘志満々たるものがその全身に現はれていた。」と記されている。

長與は自身も一高在学中に野球部員として活躍し、父親の専齋から「勉強も怠ってはならない」と叱られるほど野球に熱中したという。それが高じてか、教授になった長與は東京帝大の初代野球部長を務めるなど、大学野球連盟の顧問としても尽力したとされる。プロ野球コミッショナーを務めた内村祐之(1923年医・卒)も、「兎に角先生の負け嫌ひは相当なもので、帝大の野球部長在任中、屢々ベンチに出て選手を激励する先生のお姿を見かけたものである。負けが込んで大分先生の御機嫌を損じたキャプテンなども居る筈である。昭和十三年秋のシーズンであつたか、私が帝大のベンチコーチをして、リーグ戦で大分善戦したことがあつた。この時法政とのゲーム中、相手の捕手の暴投で当然取れる一点が、三塁背後に居た審判官某に当たつたため得点に至らず、遂に零対零の引分に終つたことがある。我々も大いに残念に思つて某の不注意を憤慨したが、どうにもならず引上げた。所が家に辿り着くや否や長與先生御自身からの電話で「あれは何としたことだ!」と言ふ大した憤慨方である。まるで不注意が私にあつて叱るかのやうな権幕であつた。然し斯様なところにも如何にも先生らしい率直な熱情が表れて居て却つて胸の透く思ひがするのである。」「(『鉄門』20巻臨時号、1941年)と、野球好きな長與の性格を端的に証言している。

おわりに

以上、戦前期に大学総長を務めた濱尾・外山・長與の逸話をひも解いて、あらためて気付かされることがある。たしかに各人個性的な人物らであることに相違ないが、やはりその恩師を慕い想う本学卒業生らの存在である。大学総長の逸話を調べるにあたって、本学校友会や同窓会の追悼遺文集などが重要な手がかりとなつたといえる。古書業界でも“饅頭本”(故人を追悼して関係者らが制作配布した追悼遺文集のこと)という表現があるが、それは葬儀にあたって饅頭の代わりに故人の追悼遺文集を配布したことに由来すると聞く。饅頭本は、本としての市場価値はたとえ低いかもしいないが、故人を慕う関係者らの想いといった付加価値は高く貴重な文献史料である。大学の教育力があらためて問われる現在、大学総長を含め教職員と学生らとの根源的な関係性を問題視するうえで、歴史的にも貴重な本学校友会・同窓会雑誌などにこれからも注目していきたいと思う。

(たにもと むねお：大学史史料室)

受贈図書一覧（抄）（平成21年10月～平成22年1月）

一八八〇年代教育史年報 第一号 一八八〇年代教育史研究会	平成21年10月	愛知大学史研究 2009年度版（第3号） 愛知大学東亜同文書院大学記念センター	平成21年10月
同窓会通信 第1号 一高同窓会	平成21年12月	大阪市立大学史紀要 第2号 大阪市立大学大学史資料室	平成21年10月
霞城館だより No.49 霞城館	平成22年1月	関東学院一二五年史 関東学院	平成21年10月
関東学院の源流を探る 関東学院	平成21年10月	京都大学大学文書館だより 第17号 京都大学大学文書館	平成21年10月
総合資料館だより No.161 京都府立総合資料館	平成21年10月	皇學館館史編纂室資料展第五回 展示目録 皇學館 館史編纂室	平成21年11月
皇學館館史編纂室資料展第五回 皇學館大學の百二十七年 皇學館 館史編纂室	平成21年11月	特別展 まつりのそなえ－御食たてまつるもの（図録） 國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター	平成21年10月
アーカイブズ 第37,38号 国立公文書館	平成21年10月、 平成22年1月	国立公文書館年報 第38号（平成20年度） 国立公文書館	平成21年9月
青淵 第七二八～七三一号 渋沢栄一記念財団	平成21年11月～ 平成22年2月	北の丸－国立公文書館報－ 第四十二号 国立公文書館	平成21年10月
大学アーカイヴズ No.41 全国大学史資料協議会東日本部会幹事会	平成21年11月	東京大学アイソトープ総合センターニュース VOL.40NO.2,3 東京大学アイソトープ総合センター	平成21年9月,12月
環境安全 No.123 東京大学環境安全研究センター	平成21年12月	UP 444～447号 東京大学出版会	平成21年10月～ 平成22年1月
東京大学史料編纂所報 第44号 東京大学史料編纂所	平成21年10月	東京大学生産技術研究所年次要覧 第57号 東京大学生産技術研究所	平成21年10月
東京大学先端科学技術研究センター 2009-2010 東京大学先端科学技術研究センター	平成21年9月	国際社会科学 第58輯 東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻	2008年度
学環学府 27 東京大学大学院情報学環・学際情報学府	平成21年10月	東京大学理学系研究科・理学部ニュース 41巻4号,5号 東京大学大学院理学系研究科	平成21年11月、 平成22年1月
物性研だより 第49巻第3号 東京大学物性研究所	平成21年10月	東京大学法学部 研究・教育年報 20 東京大学法学部	平成21年10月
東京大学埋蔵文化財調査室報告書 9 東京大学埋蔵文化財調査室	平成21年12月	江戸東京博物館NEWS vol.67,68 東京都江戸東京博物館	平成21年9月,12月
東北大学百年史 十一 資料四 東北大学	平成21年11月	徳川記念財団会報 第14号 徳川記念財団	平成21年12月
佐佐木信綱記念館特別展図録 芸術院会員の歌人たち－佐佐木信綱から幸綱まで－ 佐佐木信綱記念館	平成21年11月	名古屋大学附属図書館2009年秋季特別展示 学校沿革史は語る－近代日本の中等学校と名古屋大学の前身校（図録） 谷本宗生	平成21年10月

野間教育研究所紀要 第48集 野間教育研究所	平成21年10月	福岡大学75年の歩み 写真・年表編 福岡大学75年史編纂室	平成21年10月
佛教大学報 第59号 佛教大学	平成21年10月	赤れんが 第45号 北海道立文書館	平成21年12月
横浜開港資料館 催しもの案内2009.10.1～2010.3.31 横浜開港資料館		開港のひろば 第106,107号 横浜開港資料館	平成21年10月, 平成22年1月
立命館大学国際平和ミュージアムだより VOL.17-2 立命館大学国際平和ミュージアム	平成21年12月	地方史研究 第三四一,三四二号 谷本宗生	平成21年10月,12月
関東教育学会紀要 第36号 谷本宗生	平成21年10月	研究叢書 第10号 谷本宗生	平成21年10月
教育学研究 第76巻 第3号 谷本宗生	平成21年9月	1880年代教育史研究会ニューズレター 第27号 谷本宗生	平成21年11月
大東文化歴史資料館だより 第7号 谷本宗生	平成21年11月	AGS NEWS 第16号 谷本宗生	平成21年11月
龍谷大学三七〇年の歩み 谷本宗生	平成21年10月	青山学院資料センターだより 創刊号 谷本宗生	平成21年12月
北陸史学 第五十五,五十六号 谷本宗生	平成18年12月, 平成19年12月	記念館だより 第49号 谷本宗生	平成21年11月
かわら版 第277～280号 谷本宗生	平成21年10月～12月	日本教育史往来 No.182,183 谷本宗生	平成21年10月,12月
大学史研究通信 第60号 谷本宗生	平成21年10月	勸学院の雀 第166,167 谷本宗生	平成21年10月,12月
教育史学会 会報 No.106 谷本宗生	平成21年11月	地教史学通信 第115号 谷本宗生	平成21年10月
中部教育学会会報 第36号 谷本宗生	平成21年10月	武蔵野美術大学のあゆみ 1929-2009 谷本宗生	平成21年10月
日本教育史研究 第二八号 谷本宗生	平成21年10月	学都 No.34,35 谷本宗生	平成21年10月,12月
東京大学大学院教育学研究科教育学部60周年誌 谷本宗生	平成21年11月	東京大学教育学部創立60周年記念 (DVD) 谷本宗生	平成21年
大阪国際学園 創立80周年記念誌 谷本宗生	平成21年10月	大阪国際学園 創立80周年記念 (DVD) 谷本宗生	
巖 平著『三高の見果てぬ夢-中等・高等教育成立過程と折田彦市-』(抜刷) 谷本宗生	平成21年7月		

史料室日誌抄録（平成 21 年 10 月～平成 22 年 1 月）

- 10月10日（土）～10月11日（日）
谷本室員、教育史学会大会の司会に従事（名古屋大学）。
- 10月23日（金）
谷本室員、教育学部60周年DVD撮影対応。
- 10月28日（水）
谷本・山口室員、大学創立70周年特別展示の見学・調査（名古屋大学）。
- 11月19日（木）
谷本室員、情報学環小川ゼミ生見学対応。
- 11月20日（金）
『東京大学史史料室ニュース』第43号刊行、発送。
- 11月27日（金）
谷本室員、濱田総長らの大学予算緊急説明会に参加。
- 11月29日（日）
谷本室員、1880年代教育史研究会に参加（高円寺）。
- 12月9日（水）
谷本室員、若井統括長（法務・総務系）らの巡視対応。
- 1月13日（水）
谷本室員、大学入試センター試験分封作業に従事。
- 1月16日（土）
谷本室員、市民講座講師のため出張（金沢大学）。
- 1月22日（金）
谷本室員、第67回史料保存委員会参加（本部棟9階会議室）。
- 1月25日（月）
谷本室員、学部講義のため出張（金沢大学）。

この間の閲覧者数

学内者 2名
学外者 6名

主な学外閲覧者所属機関

北海道大学大学文書館、成蹊学園史料館、立教大学

その他

文献撮影・複写許可件数 5件
調査（照会）件数 23件

大学史史料室所蔵史料の紹介

雑誌『学生』は、東京・富山房が1910年5月～1918年5月まで発行した月刊教育雑誌である。書誌家の森銑三（1895～1985年）も「その生命は長くなかったけれども、誌面に男性的な剛健な気分が漲っていた。そうした一つの個性があり、天下の学生青年を健全に導いて行こうとする主義方針を以て一貫していた。×××その後には青年雑誌らしい青年雑誌の生れるに至らず」（『青年図書』『書物』1944年）と評している。

題字 森 巨元総長

東京大学史史料室ニュース 第44号

発行日：2010年3月31日（年2回発行）

編集・発行：東京大学史史料室

東京都文京区本郷7-3-1

電話：03（5841）2077（直）

印刷所：株式会社 ワーナー

Archives Section of the University of Tokyo

千葉県稲毛区六方町13-2